



注目される豪ドル/円急落後の相場展開

一時76円50銭まで急落した豪ドル/円相場

真夏の外国為替市場で豪ドル/円は思わぬ急落劇に巻き込まれる展開となった。8月9日の東京・オセアニア市場で豪ドル/円は一時76円50銭と、8月1日に記録した直近高値の86円14銭から僅か7営業日で最大9円64銭も下落、騰落率にして約▲11.2%も値崩れする場面があった。

この結果、最近の豪ドル/円のチャート・フェイスを眺めてみると、①今年7月には下値サポートとして寄与していた200日移動平均線を明確に割り込んでしまったほか、②これまで上向きで推移していた200日線自体の傾きが概ね水平となり、③20日移動平均線が200日線を上から下に抜ける通称「デッド・クロス」が完成するなど、トレンド系のテクニカル指標では一段の下押しリスクを暗示するシグナルも出始めている。

その後はさすがに買い戻され、目先最重要の下値

攻防線となる「昨年5月安値の71円85銭と今年3月安値の74円25銭を結ぶライン」を割り込まずに下げ止まったが、1豪ドル=80円前後での上値が重く、反発力の鈍い状態が続いている。本邦FX業界にファンが多い通貨ペアなので、今後の動向が非常に注目されているが、足下の豪ドル/円の反発を、相場底打ちの予兆だとみてよいのか、下落トレンドの最中に一時的に現れたダマシだとみるべきなのか、市場参加者の意見は割れているのが実情だ。果たしてこれから、豪ドル/円はどちらに向かうのだろうか。

豪ドル/円の失地回復を期待する2つの理由

以下はあくまで私見だが、筆者は今後の豪ドル/円相場は失地回復に向かう可能性が高いと考えている。論拠となる理由を2つ挙げておきたい。

第1に、豪州準備銀行(RBA)の金融政策に対する

2010年4月以来の豪ドル/円相場の推移



(出所) 外為どっとコム"FX Vision"

本レポートは、投資判断の参考となる情報の提供を目的としたものであり、投資勧誘を目的として提供するものではありません。投資方針や時期選択等の最終決定はご自身で判断されますようお願いいたします。また、本レポートに記載された意見や予測等は、今後予告なしに変更されることがございます。なお、本レポートにより利用者の皆様に生じたいかなる損害についても、株式会社外為どっとコム総合研究所ならびに株式会社外為どっとコムは一切の責任を負いかねますことをご了承願います。

Copyright©2011 Gaitame.com Research Institute Ltd. All Rights Reserved. www.gaitamesk.com

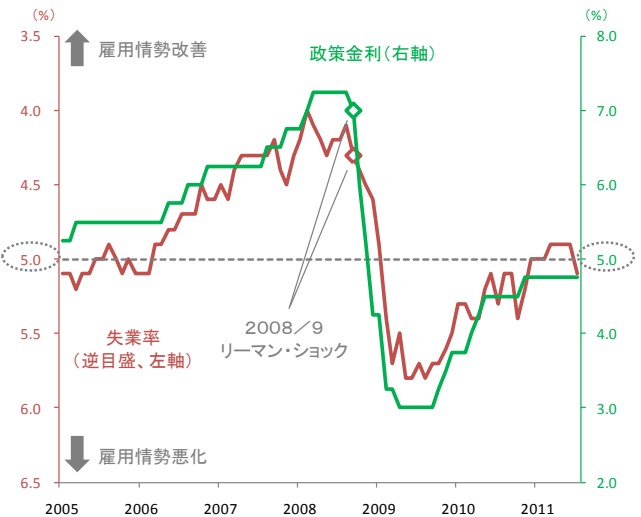


市場心理がやや弱気に振れ過ぎている。豪州の短期金融市場の動きなどから試算される「向こう1年間の金融政策予想」の動きをみると、最近ではマイナス150ベース・ポイント付近で推移しており、0.25%刻みで約6回分の利下げが織り込まれていることが分かる。

最近の豪州経済に一時のような勢いが無いのは事実だが、RBAの金融政策運営への影響力が強い同国の失業率の動きをみると、最近において改善の動きは止まっているものの、概ね5.0%前後の水準で推移しており、即座に大幅な利下げを必要とするほど、足下の豪州景気が悪化している訳ではない。過去の相関からみる限り、失業率5.0%に相当する妥当な政策金利の水準は概ね現在の4.75%程度と合致している。豪州の消費者物価上昇率の水準をみても、RBAが重視している基調インフレ率は政策目標圏内で上向き加減に推移している。今後よほど急速に豪州景気が悪化してデイス・インフレ期待が強まらない限り、豪州の金融市場で台頭している過度の利下げ期待は修正される可能性が高そうだ。

第2に、この夏場に加速した世界同時株安には、やや行き過ぎの感がある。これまで再三指摘してきたが、豪ドルは「相対的高金利と資源輸出に強みを持つ中小規模の先進国通貨」として、グローバルな株価変動に象徴される地球的規模での景況感の強弱に反応して

豪州の失業率と政策金利



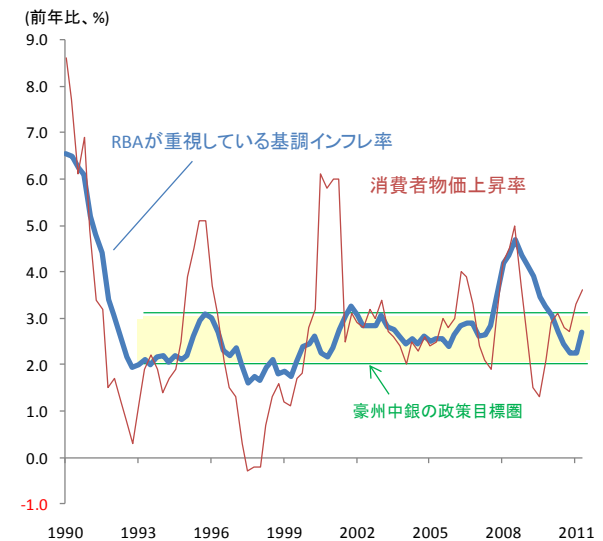
(注) 豪州の政策金利はオフィシャル・キャッシュ・レート、月末値 (出所) ブルームバーグ

台頭する豪州の利下げ観測？



(注) 想定政策金利変更回数は豪州短期金融市場の動きなどから試算。一回の利上げ/利下げ幅を0.25%ポイントと仮定。 (出所) 外為どっとコム総合研究所

豪州の消費者物価上昇率の推移



(注) 基調インフレは(刈り込み平均値+加重中央値)/2で算出 (出所) ブルームバーグ

本レポートは、投資判断の参考となる情報の提供を目的としたものであり、投資勧誘を目的として提供するものではありません。投資方針や時期選択等の最終決定はご自身で判断されますようお願いいたします。また、本レポートに記載された意見や予測等は、今後予告なしに変更されることがございます。なお、本レポートにより利用者の皆様に生じたいかなる損害についても、株式会社外為どっとコム総合研究所ならびに株式会社外為どっとコムは一切の責任を負いかねますことをご了承願います。



ダイナミックに上下する」という特徴をもっている。このため、豪ドルは「市場のリスク許容度が緩和する時期に買われやすい通貨」の代表格とみられているが、「市場のリスク許容度が収縮する時期に買われやすい通貨」の典型例である日本円との交換レートは特にその傾向が強く、近年の豪ドル/円相場はMSCI世界総合株価指数との相関が非常に高いことが知られている。

7月下旬以降、世界総合株価指数は約半月間で12.9%も急落したが、この間、これほど急激な株価の暴落を説明できるほど主要国の経済指標や企業収益が悪化したとは思えない。リーマン・ショックを端緒に引き起こされた世界金融危機以降、市場参加者は「目に見えないリスク」の拡散懸念に対し過敏になっており、最近の株価の急落は、米国債の信用を人質にとって債務不履行寸前まで繰り広げられた米国ワシントンでの政治ショーや、その副産物ともいえる米国債の格下げショックに過剰反応した群集心理の所産という側面が強かったのではなかろうか。これだけ急激な株価の値下がりを受けて、主要国の景気回復期待が揺らいでい

るのは間違いないが、その結果として各国の金利水準が一段と下がって原油価格も下落するなど、景気や企業収益にプラスの環境変化も生じている。主要国の景気腰折れ懸念が後退して株価が持ち直してくれば、豪ドル/円相場にも失地回復の余地が生まれるのではなかろうか。

実際、最近の豪ドル/円の値動きをみても、株価の一時的な下振れ局面にこそ、絶好の買い場が訪れているケースが多い。①昨年5月のNY株誤発注騒動から始まった世界同時株安局面で示現した1豪ドル=71円台、②今年3月の東日本大震災後の一時的な株価値崩れ局面に現れた同74円台、などがその好例だが、この夏場に勃発した世界的な株価の下落を行き過ぎだとみるならば、先週記録した1豪ドル=76円台もバーゲンだった可能性が高いのではなかろうか。

鍵を握る今後の世界景気動向

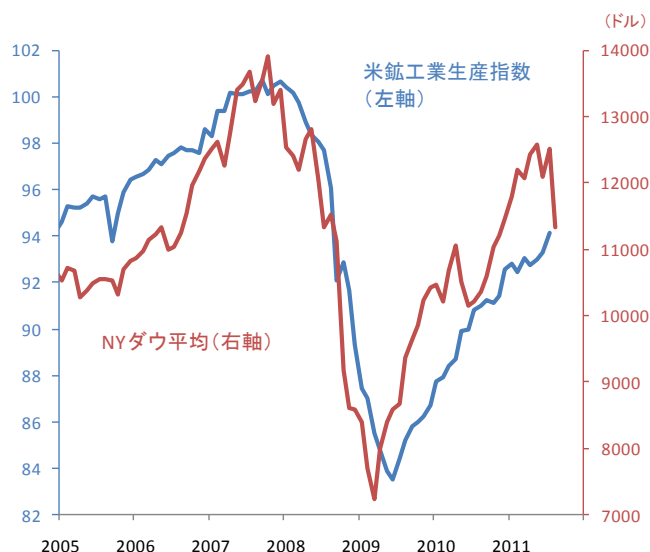
もちろん、以上は全て世界景気の緩やかな回復傾向の継続と株価の反発を前提にした私的な相場観で

MSCI 世界株価指数と豪ドル相場



(注) 週間平均値
(出所)ブルームバーグ

米国の株価と鉱工業生産指数の推移



(注) NYダウ平均は月中平均値。但し2011年8月は19日までの平均値
(出所)ブルームバーグ

本レポートは、投資判断の参考となる情報の提供を目的としたものであり、投資勧誘を目的として提供するものではありません。投資方針や時期選択等の最終決定はご自身で判断されますようお願いいたします。また、本レポートに記載された意見や予測等は、今後予告なしに変更されることがございます。なお、本レポートにより利用者の皆様に生じたいかなる損害についても、株式会社外為どっとコム総合研究所ならびに株式会社外為どっとコムは一切の責任を負いかねますことをご了承願います。

Copyright©2011 Gaitame.com Research Institute Ltd. All Rights Reserved. www.gaitamesk.com



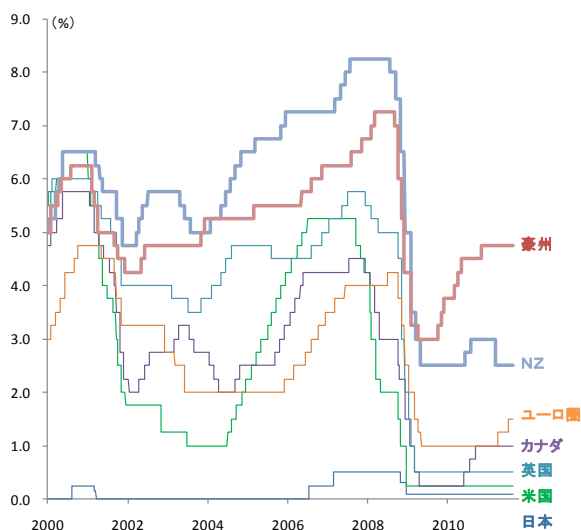
あり、今後世界景気が後退局面に入る場合はこの限りではない。今後も株価下落に歯止めがかからず、これから世界経済が腰折れに向かう場合は、①先述のRBAによる大幅な利下げ期待が現実味を帯びてくるほか、②世界景気に敏感な資源価格の値崩れや、③投資家のリスク許容度の萎縮、などが三位一体の豪ドル売り要因と認識されて豪ドル/円は一段安の嵐に巻き込まれる可能性もある。こうした状況下では、「現在の豪ドルに備わっている先進国最高水準の金利の魅力」は「先行きの利下げ余地の大きさ」に読み替えられ、これまで人気を集めていたことが逆に仇になって買い方のストップ売りやロスカットなどを巻き込み、予想外の水準にまで続落する可能性もある。

東京金融先物市場における最近の豪ドル/円の持ち高をみると、夏場の急落局面では「逆張りの買い」が膨らんでいたことが確認されており、私と同じような相場観で今回の豪ドル/円相場の急落に対応した向きが多かったことが示唆されている。その後の豪ドル/円の反発局面である程度の利食いも進んだとみられるが、ま

だ解消されていない買い持ち高も多く、今後これらが利益確定の売りという形で圧縮されるのか、思わぬ急落によるストップ売りやロスカットという形で目減りするの、鍵を握るのは今後の世界経済、株価の回復力ということになりそうだ。

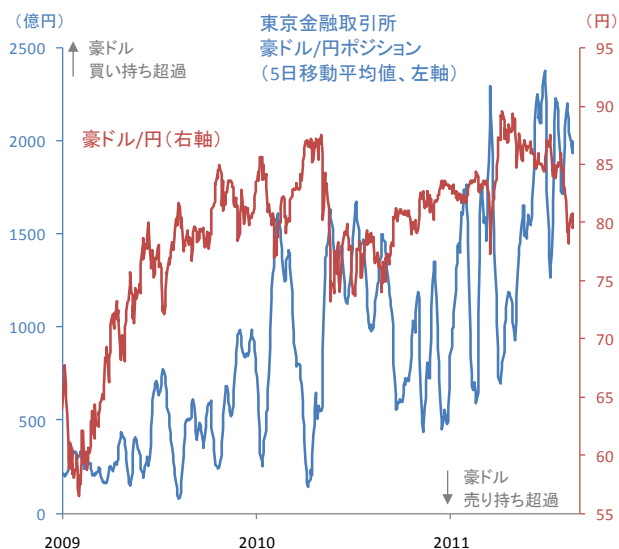
「良くも悪くも値動きが非常に派手」なのが豪ドル/円相場の特徴だが、「グローバルな景況感の強弱に概ね連動して上下する」という値動きの仕組み自体はとてもシンプルで分かり易いのがこの通貨ペアの持ち味でもある。FX取引に勝敗はつきものだが、勝っても負けてもその理由が比較的ハッキリしているのが豪ドル/円の長所であり、やや長めの時間軸で売買に取り組んだ場合、勝因が良く分からない「結果オーライの儲け」や、敗因が良く分からない「不思議な損」がほとんどないのが、この通貨ペアの長所だと言えるかもしれない。個人的には今回の豪ドル/円の差し込みを良い買い場ではないかと感じているが、結果的にその判断が正しかったことが証明されるのを期待しつつ、グローバルな景気動向の観察を続けたいと思っている。

主要国の政策金利の推移



(出所)ブルームバーグ

本邦FX筋の豪ドル持ち高と豪ドル/円相場



(注)通貨ポジションは非商業筋と非報告筋の合計
(出所)東京金融取引所およびブルームバーグ

本レポートは、投資判断の参考となる情報の提供を目的としたものであり、投資勧誘を目的として提供するものではありません。投資方針や時期選択等の最終決定はご自身で判断されますようお願いいたします。また、本レポートに記載された意見や予測等は、今後予告なしに変更されることがございます。なお、本レポートにより利用者の皆様に生じたいかなる損害についても、株式会社外為どっとコム総合研究所ならびに株式会社外為どっとコムは一切の責任を負いかねますことをご承願いたします。

Copyright©2011 Gaitame.com Research Institute Ltd. All Rights Reserved. www.gaitamesk.com